

進化経済学会
ニューズレター NO. 25
Jan. 2009

進化経済学会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19

国際文献印刷社内

T:03-5389-6493 E:evoeco-post@bunken. co. jp



*****記事*****

第13回進化経済学会・岡山大会

サマースクール・オータムカンファレンス開催報告

第IV期第6回理事会記録

会長・理事選挙結果

文献紹介

岡山大会事務局からのお知らせ

編集後記

2008 年度進化経済学会岡山大会 サマースクール・オータムコン ファレンス

サマースクール・サマリーズ（小川一
仁）

今年度のサマースクールは9月20日（土）に岡山大学島キャンパス自然科学研究科・環境学研究科棟 2F 第2講義室において、若手研究者対象の企画として「プロ研究者になろう！」と銘打って、以下の2部構成で行いました。進化経済学会も他の学会同様院生が少なくなってきましたので、「本当に若手が集まるのだろうか」と危惧していました。しかし、出席者は大学院生を中心に、20名を超え、例年になく盛況だったと主催者一同胸をなで下ろしました。

第1部は2人の研究者－北陸先端科学技術大学院大学の橋本敬先生と立命館大学の筒井淳也先生－を迎えて講演を行って頂きました。

第1演者の橋本先生は、「夢の展開と現実へのグラウンディングーやりたいことをいかに研究にするかー」という演目で研究テーマ設定、研究プロポーザル、論文、グラントの書き方について公演して頂きました。ご自身の研究履歴やそこでの経験を絡めながら、どのように研究を進めていけばよいかを報告して頂きました。特に、「研究テーマをどのように設定するか」、「研究の意義の伝え方」、「学会発表などを用いた研究のペースメーカー」に関して綿密に議論して頂きました。

第2演者の筒井先生は社会学理論の到達点と制度派経済学について、ご自身の研究スタイルを交えながら講演されました。最初に今日の社会学の現状について、主流で

ある社会調査を元にした実証分析（SSM や JGSS など）とある種傍流である数理社会学を取り上げ、紹介されました。また社会学の学際性についても言及され、学際性を標榜する進化経済学との共通点についても話されました。さらに新制度派経済学と、ギデンズに代表される社会学の構造化理論の相似性について論考されました。特に行為が出发点ではなく、構造（制度）が出发点であること、合理的に制度を作り上げる人間像ではなく、制度の中に投げ込まれている人間像を持つ点、普段は伝統、習慣に従って行動している点などを指摘されました。最後に社会学の将来について、他分野との連携も含めて展望されました。



オータムコンファレンス・サマリーズ
(清水耕一)

今年度のオータムコンファレンスは9月21日(日)に岡山大学創立五十周年記念館ホールにおいて「共進化を考える」をテーマに行ないました。「共進化」は捕食者-被食者関係のダイナミクスや進化ゲーム論などにおいて議論され、進化経済学にとってはなじみの深いテーマですし、現実の経済における相互依存関係を前提にすると生物進化の分野のみではなく、様々な分野において共進化が観察され、研究の進展が期待されます。例えば、比較制度分析における制度補完性を考えた場合、あるドメインにおける制度の変化は、制度的配置全体を変質させ、制度間の共進化を引き起すと考えられます。その場合、部分的な制度の変更はシステム全体の首尾一貫性を破壊するかも知れませんし、一企業の進化について見てもサクセス・ストーリーの模倣は制度的補完性のゆえに模倣対象ほどの成功は期待できないでしょう。

このような問題意識から共進化に関する認識を深める機会となればと考え、本コンファレンスでは、クルト・ドプファー教授(ザンガレン大学)の「進化経済学のための統一的体系」に関する特別講演の後、西部忠(北海道大学)の司会によって、以下の3名の会員及びロベール・ボワイエ教授(招待パネラー)に以下のような報告を行なって戴きました。

・浅田統一郎(中央大学)

「非線形動学における共進化」

・ロベール・ボワイエ(フランス CEPREMAP&GREDOG)

「制度と技術進歩は共進化する：レギュレーション・アプローチ」

・橋本敬(北率先端科学技術大学)

「言語と社会(集団)の共進化」

・塚本隆夫(日本大学)

「ヴェブレンにおける制度と技術の『共進化』--『進化論的経済学』の視点から--」

ドプファー教授の特別講演および各パネラーの報告の要旨をごく簡単に紹介すると以下のようです。

ドプファー教授は、進化経済学の諸研究に統一的・体系的枠組みを与えるために、「ミクロ-メゾ-マクロ関係(framework)におけるジェネリック(類形式的、一般的)分析」を提唱した。基本的な分析装置としてキャリアー、ルール、オペレーションを導入(全ての存在はルールの担い手=キャリアー)し、主観的ルール(認識論敵ルールと行動上のルール)と客観的ルール(社会系のルールと技術系のルール)を区別した上で、経済システムに関するジェネリック・レベルとオペレーション・レベルの区別の重要性を強調した。その上で、①ルールの起源、②ルールの採用、③ルールの維持というジェネリック・プロセスに対応して、①想像と発見(起源)、②知識基盤におけるルールの適用(採用)、③オペレーションの繰り返しによる習慣化という過程を進化経済学的ミクロ経済学のコアとして説明し、さらにメゾ・レベルおよびマクロ・レベルでの考え方を説明した。

浅田統一郎氏は、「二つの進化子の間に相互依存的な進化が見られるとき、その変化を共進化と呼ぶ」という塩沢由典氏の定義に基づいて、捕食者と被食者を共進化する進化子と理解して非線形動学における共進化分析の可能性を説明した。捕食者・被食者モデルであるロトカ=ヴォルテラ方程式を説明した上で、進化ゲーム論における

リプリケーター・ダイナミクスばかりでなく、カルドア型景気循環における実質国民所得と実質資本ストックの関係、ミンスキー型景気循環における所得と負債の関係（及び期待物価上昇率を加えた3次元モデル）、ユーロ圏の2国間関係のような固定相場制の下での2国間の共進化のモデル化（5次元カルドア景気循環モデル）、産出量・資本比率、賃金分配率及び期待物価上昇率を変数として財政政策の反応ラグと、景気に対する政府財政支出の反応度の関係を分析したケインズ＝グッドウィン・モデルによる財政政策による安定化政策の分析まで、捕食者・被食者モデルの応用範囲の広さと、さらなる応用可能性を説明した。

ロベール・ボワイエ氏によれば、様々な成長体制は技術進歩と制度的配置との間の両立可能性・補完性によって生み出され、技術進歩が経済制度に不適合であれば技術進歩は経済成長にとって有害なこともあり得る。進化経済学は、これまで技術進歩における規模に関する収穫逓増や経路依存性の役割、制度・組織・産業特化における共進化と補完性を分析してきた。ボワイエ氏はレギュラシオン理論の立場から、制度的アーキテクチャーにおける補完性が中心的論点であるとして、市場主導型資本主義、メゾコーポラティスト型資本主義、社会民主主義型資本主義及び国家主導型資本主義の制度的アーキテクチャーを説明し、また一貫性を欠いた制度的配置を持つ経済の代表例としてアルゼンチンを挙げ、不安定な政治的妥協及び労使間妥協が不安定な経済成長を生み出すメカニズムならびに制度変化による成長メカニズムの安定化を説明した。そして、最後に同氏は、経済主体間のコーディネーションの在り方の重要性を強

調した上で、成長は技術進歩と制度的諸形態の補完関係の結果であると説明した。

橋本敬氏は、言語において集団が作る構造が主体の内部にある言語知識にどのような影響を与えるだろうかという、興味深く、経済学研究者にとっては新鮮な研究を紹介した。橋本氏によれば、Hashimoto & Ikegami (1996) が、共通語彙をやりとりする集団が社会に形成されることで、社会を流れる情報量が断続平衡的に変動し、その結果として単語と文の言語知識を分離するように内的な知識に創発的構造が生じることを示している。この共通語彙を用いる集団は、行動・思考のルールを共有した集団で、一種の制度が成立した状態と考えることができる。内的な知識とそれによって作られる集団構造、その集団構造によって作られる内的知識という、異なるレベルにある存在の相互創造関係は、進化生物学におけるニッチ構築 (Odling-Smee et al, 2003) と類似する。これは一種の自己言及・自己改変システムであり、作用するものとされるものの非分離、すなわち、オペレータとオペランドの分離不可能性という複雑系の特徴を有する (Hashimoto, 2007)。こうして、橋本氏は、ニッチ構築はミクロマクロ・ループとの類似性もあり、制度進化を考える上で有効であると思われる、と述べた。

塚本隆夫氏は、ヴェブレンの提唱した「進化論的経済学」の主内容を消化し、技術と制度の共進化に関するヴェブレンの考えを説明しようとした。ヴェブレンは経済学を「文化科学としての経済学」として捉え、ニュートン主義的な目的論的变化観とは異なって、「ダーウィン主義的進化」観を採用して「変化」を無目的論的累積的变化過程と捉えていた。このようなヴェブレンの

「進化」観を説明した上で、塚本氏はヴェブレンのアメリカ資本主義経済体制論を「営利企業体」（私有財産制度）と「産業体制」（科学技術の社会性としての生産システム）からなる二重構造を持つものと考え、ヴェブレン経済学における科学技術と制度の相互作用による進化過程を説明した。すなわち、この二重構造は、「制作本能」（効率性の追求）と、その「汚染」としての「略奪本能」（競争心）とにもとづいた制度の進化の結果である、と。

各パネラーの報告の後、西部忠氏の司会によって、ドプファー教授も交えてパネラーによる発展や変化と区別される「進化」とはどのような概念であるのか等々についての討論が行われた。なお、オータムコンファレンスの参加者は50名程度だった。



進化経済学会第 IV 期第 6 回理事会 記録

記録作成者：会長・八木紀一郎

1. 進化経済学会第 IV 期第 6 回理事会は、2008年9月21日の午前11時から12時半まで、岡山大学経済学部で開催された。出席者は、会長、副会長、19理事、1会計監査委員、欠席11理事（うち議長宛委任状提出5理事）であった。また、役員選挙準備のため中原隆幸選挙管理委員長に出席を依頼した。

2. 前理事会の前に年度末退会の意思表示があったもの3名、前理事会以降受け付けた退会者は10名であった。他に、会則第7条の適用（会費3年滞納後さらに1年間待った上での適用）によって平成19年度末に除籍された会員が17名存在する。

（なお、この措置によって除籍された会員が会員資格を回復するには、再入会の手続きを要するが、その際には、滞納会費分が請求される。）さらに、会則第7条の適用者ではないが、会の外部から支援してもらうことにした会員が2名いる。

3. 入会申込者は10名あり、全員が入会資格を充たしているものと判定した。うち一人については本人自署の入会申込書が整っていなかったが、本人の入会意思が確認されれば入会を認めるとした。

4. 上記の結果会員数は、休会会員も含めて個人会員471名（うち会費減免会員通称学生会員92名）、賛助会員1団体（1賛助者の2アドレス）、招待会員2名で計474会員となる。今理事会での入会資格承認者は今年度からの会員として役員選挙用の会員名簿に記載する。休会者などの確認も含めた会員名簿の点検作業を現在、選

挙管理委員会の監督のもとに行っていて、選挙はそれをもとに選挙権保持者によっておこなわれる。

5. 安孫子誠男監査委員、服部茂幸監査委員の確認署名のはいった平成19年度決算書[ニューズレターに添付予定]が配布され、その概要が報告された。その後、安孫子監査委員より監査の報告があった。

6. 平成20年8月31日現在の学会会計状況の報告があった。

7. 今年度第13回大会の報告申し込み状況について大会運営委員会から説明があり、申し込み期限を10月末まで延長することとした。

8. 第14回大会を四天王寺大学（大阪）で開催の方向で進めることとした。同大学の会員はごく少数なので、近隣大学所属会員の協力が要請された。

9. 第V期の役員選挙にあたり、会長・副会長の候補者と推薦理事の候補者を選定した。これらの候補者の承諾を得た上で、選挙管理委員会が投票用紙に当該候補者の氏名を印刷により記載する。（なお、理事会による推薦候補は、自由記入による理事選出を尊重するため、理事会定員の半数をこえないようにとりきめられている。）

10. 編集委員会から Evolutionary and Institutional Economics の編集・刊行状況についての報告があった。

11. 会計年度の明文規定がないので科研費申請などの際に問題になるので、「理事会運営細則」に会計年度の規定を入れたいと提案され、同細則の第16条として、以下のような規定を入れること決定した。その結果、旧第16条は、新第17条にな

り、以下の条文はみな同様である。新第16-18条の部は「決算と予算」から「会計年度、決算と予算」となる。

「第16条 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。ただし、大会その他の当年度事業の会計処理で翌年度にもちこしたものは前年度会計で処理することができる。」

12. 部会活動の報告は省略された。

<退会者>

松岡利道、岡本隆、山本秀一、藤田整、堀江典生、三土修平、中谷巖、野中郁次郎、山本栄一、辺見和晃、渡辺肇、石井吉文、川端勇樹、黒田東彦、鈴木興太郎

<会則7条適用者>

17名 氏名省略

<入会資格承認者>

寺野隆雄、武田壮司、佐々木啓明、松山淳、宮崎義久、浅沼大樹、西垣鳴人、新井田智幸、小林重人、深見聡

平成 21 年 1 月 16 日

進化経済学会 会員各位

第 4 回進化経済学会全役員選挙結果の報告

標記の件について、平成 20 年 12 月 20 日（土）14 時から、四天王寺大学 事務局棟 1 階 会議室 1 において、厳正なる開票作業を行い以下の結果が得られたので報告する。

1. 総投票数について

総投票数 97 票（うち副会長選挙に関しては無効票 2 票、推薦理事については無効 1 票、追加理事については白票 33 票、未投票 13 票）

2. 会長選挙の結果について

信任多数をもって現副会長の吉田和男会員が選出された。

3. 副会長選挙の結果について

過半数以上の信任をもって藤本隆宏会員が選出された。

4. 推薦理事選挙の結果について

信任多数をもって推薦理事全員が選出された。

5. 追加理事選挙の結果について

開票作業の後確定した 15 名の理事候補者それぞれに就任の許諾を求めたところ、1 名の候補者から辞退の申し出があった。また次点候補者は得票数が同数であったため、2 名の候補者それぞれに許諾を求めたところ、快諾を得た。したがって、選挙管理委員会の規定に従い追加理事は 1 名増となり、以下の 16 名になった。

（記載はアイウエオ順、敬称略）

浅田統一郎、荒川章義、依田高典、植村博恭、宇仁宏幸、佐藤良一、清水耕一、谷口和久、徳丸宣穂、長尾伸一、鍋島直樹、萩原泰治、平野泰朗、宮本光晴、山田鋭夫、若森章孝

以上

進化経済学会 選挙管理委員会
委員長 中原隆幸
委員 山本泰三
委員 小川一仁

文献紹介：MOT 叢書『演化経済学』

陈劲 王焕祥 編
清华大学出版社

評者：舛田佳弘（北海道大学経済学研究科
博士課程）

世界的に見ても進化経済学の教科書とい
うのは未だ少ないと思われるが、本書は中
国語で書かれた進化経済学の教科書とし
ては初のものであろう。著者の陈劲は浙江大
学公共管理学部の教授であり、ポストドク
ターの王焕祥と共同研究を行っている。

書名にある「演化」とは、日本語にする
と「進化」と同義である。しかし、中国語
にも「進化」という言葉があるにもかかわ
らず、何故この言葉を使ったのか。本書第
2章によると、「進化」という言葉は発展
や高等化といった「向上」の意味を含んで
いるので、「内的性質の変化」というより
広い意味での「演化」を採用したというこ
とである。なにぶん評者は本書のテーマに
ついて不勉強なため、踏み込んだ議論は行
わず、内容の簡単な紹介としたい。

本書は革新（イノベーション）を主軸と
して、近年発展を遂げてきた進化経済学を
紹介しており、その序文には「人間社会に
おける制度の進化と技術革新が進化経済学
の二つの根幹であり、…制度と技術の革新
は、ちょうど人間社会が進化するための二
大動力源のようなものであるとともに、新
古典派経済学研究の弱点でもある」とある。
進化経済学は未だ成熟した理論体系に収斂
していないが、本書ではシュンペーター的
な要素結合の革新を枠組みとすることが述
べられている。以下に目次を挙げる。

- 第1編 序論
- 第1章 革新とその進化分析モデル
 - 1.1 技術革新の発展
 - 1.2 革新の経済学と革新の進化的解釈
 - 1.3 主流派経済学の理論的危機
 - 1.4 本書の読み方と展望
- 第2章 進化論から進化経済学へ
 - 2.1 進化論の概要
 - 2.2 進化経済学における生物学的メタフ
ァー
 - 2.3 進化経済学思想の変遷
- 第2編 進化ミクロ経済学
- 第3章 企業の進化理論
 - 3.1 企業理論の発展
 - 3.2 企業の進化理論
- 第4章 革新の進化理論
 - 4.1 進化メカニズムにおける革新の発生
 - 4.2 進化メカニズムにおける革新の過程
 - 4.3 適応的学習過程の実験
- 第3編 進化メゾ経済学
- 第5章 時間コンテクストにおける技術変
遷の進化理論
 - 5.1 進化経済学における“コンテクス
ト”分析
 - 5.2 技術革新と産業の基本概念およびそ
の進化的特徴
 - 5.3 技術革新の進化理論
- 第6章 空間的環境における技術革新の進
化理論
 - 6.1 空間的距離、産業の集積と技術革新
 - 6.2 産業クラスターと革新
 - 6.3 クラスターの革新から地域の革新へ
のシステム
 - 6.4 空間的コンテクストにおける技術革
新の進化的分析
- 第4編 技術と制度の共進化

- 第7章 制度の変遷と進化経済学
 - 7.1 制度経済学の発展史
 - 7.2 制度進化の基本理論
 - 7.3 制度変遷の進化的説明
- 第8章 経済成長の原動力としての、技術と制度の共進化
 - 8.1 技術と制度の関係についての基本的観点
 - 8.2 進化理論における技術と制度
 - 8.3 技術と制度の共進化
- 第5編 進化マクロ経済学
- 第9章 主流派経済学の成長理論
 - 9.1 経済成長の意味
 - 9.2 古典派による経済成長の説明
 - 9.3 新古典派の外生的成長理論
 - 9.4 内生的成長モデル
 - 9.5 成長要因の経験的分析
- 第10章 革新がリードする経済成長の進化理論
 - 10.1 経済成長の進化的分析の基本思想
 - 10.2 二種の技術と一種の可変的投入における成長の進化的分析
 - 10.3 多種の技術と可変的投入における成長の進化的分析
 - 10.4 経済成長の進化的分析の基本モデル

第1編である1、2章は、序論ということで、本書の中心的なテーマとなる「技術革新」と「進化」についての概説になっている。技術革新については、シュンペーターに始まる革新概念の研究の流れが紹介されている。学習や伝播といった概念の説明は時間を通じたものであり、静学的な主流派では見落とされてきたものであると述べられている。また、進化については生物進化の思想史とその方法論が説明され、多様

性・遺伝・選択を進化の原則としている。そしてマルクス・マーシャル・ヴェブレンから現代（ボールディングやネルソン&ウインター）まで進化経済学思想の流れが紹介されている。

第2編となる3、4章は進化ミクロ経済学で、企業とその革新行動に焦点を当てている。まず第3章では、新古典派および新制度派による企業理論とネルソン&ウインター(1982)によるルーティンの理論を紹介、比較している。次に第4章で生物学的類比に基づく説明として、革新の主体である企業が新奇性をルーティン化する過程（探索・学習・適応）を説明している。また、適応的学習と環境との関係を示すシミュレーション実験（Day 2001）も紹介されている。

第3編は進化メゾ経済学である。資源の制約を重視する新古典派と異なり、進化経済学では革新や経済社会構造を重視する。それらは特定の歴史的地理的背景に埋め込まれているので、時間と空間の“コンテキスト”分析が必要となる。第5章では時間コンテキストに注目し、個体群としての産業（ある技術レジームを共有する集団）の発展を説明している。革新と産業発展の関係を示すものとしてのA-U（Abernathy-Utterback）モデルと、産業分析のミクロ的基礎としてのネルソン&ウインターによるルーティンモデルが紹介されている。第6章は空間コンテキストとして、地域経済や経済地理で強調される集積の経済を扱っている。産業クラスターの自己組織化から国家（地域）イノベーションシステム（フリーマン）まで、進化という枠組みで統一的な説明を行っている。

第4編のタイトルは技術と制度の共進化である。本書では制度が技術革新の条件であると考え、その関係は未だ明確ではない。ここでは技術と制度を進化という一つの枠組みで捉えることを試みる。まず第7章では、新旧制度派の発展史と、双方による制度進化の説明を比較した上で、制度変遷の進化理論の例として、ノース（制度的均衡と不均衡）とハイエク（自生的秩序）を挙げている。第8章では、初めに技術と制度の関係についての見方を広範に紹介し（特にネオシュンペーター派と制度派、そしてレギュラシオン）、続いて生物学的アナロジー（共生）から技術と制度の共進化が述べられ、例として日本の国家イノベーションシステムと戦後のアメリカが挙げられている。

第5編の進化マクロ経済学とは、技術と制度を含む“体制”の変化に注目した、進化的経済成長論を指している。経済成長を新奇性の創発（多様性）・採用（選択）・適応（保持）の三段階で捉えるこの視点は、新古典派と異なり、マクロの成長をミクロ的主体の行動と結びつける。第9章では、スミスやマルクスといった古典派の成長論から始まり、主流派の成長理論が通常の教科書どおりに紹介されている。第10章では、革新が経済成長を推進する過程を、探索・選択・学習という概念で述べ、ネルソン&ウインターによるモデルを紹介している。最後に、新古典派による内生的成長論の、完全合理的な経済人の利潤最大化を仮定している点と、変化の過程が常に均衡に向かうとみなす点を批判して、進化的成長論の優位を示している。

上のまとめからも明らかなように、本書の内容はネルソン&ウインター(1982)に大きく依拠している。また、参考文献も欧米のものが多く（日本人は青木昌彦氏と塩沢由典氏のみ）、日本の（複雑系や経済物理学を含む）広い進化経済学とはややスタンスを異にしている。

このテキストの特徴は単に進化経済学を紹介するだけでなく、常に新古典派や新制度派といった初学者にもなじみのある学説と比較している点であろう。学部レベルの教科書としての性質上、この構成は望ましいものと思われる。全370項であるが、各章30~40項とバランスが取れており、広範かつ浅すぎない程度に、各テーマが扱われている点も評価できる。各章末の思考問題も記憶を定着させるのに有用だろう。本書の書名は『演化（進化）経済学』だが、内容が技術革新に集中しているのは、このMOT(Management of Technology)叢書という性質によるのかもしれない。また、学生には重要な点だが、価格は39元（約585円）で、中国での平均的なテキストの価格（30~35元）より若干高めではある。ただし、主流派経済学や学説史の参考書としても使えることを考えれば割安なくらいではなかろうか。「leaning by doing」=「干中学」など、訳語の点でも工夫が見られるので、中国語の読める会員（特に中国人会員）には一読の価値があろう。

進化経済学会岡山大会事務局からのお知らせ

第13回進化経済学会岡山大会は3月28日（土）～29日（日）の日程で行われる予定です。ところが、3月28日（土）～30日（月）に岡山理科大学で医学系の大規模な学会があり、3月27日（金）～28日（土）に桃太郎アリーナでスポーツの大会があるため、宿の予約が難しくなることが予想されます。宿の予約をお早めをお願いします。

なお、大会事務局では、JTBに宿の確保をお願いしています。本ニュースレター同封の宿泊予約申込書で予約を行ってください。なお、大会ホームページでもご案内していますのでご覧下さい。

〈学会事務局より2007年度収支決算のお知らせ〉

貸借対照表
(平成20年3月31日現在)

借方		貸方	
I. 流動資産		II. 流動負債	
現金	0	前受会費	60,000
預金	1,537,510	未払金	52,215
普通預金	0		
郵便貯金	802,225	III. 正味財産	
郵便振替		次期繰越金	2,714,609
仮払金	389,612	前期繰越金	-97,477
合計	2,729,347	当期差益	2,729,347

財産目録
(平成20年3月31日現在)

科目	管理部門	金融機関	金額
流動資産			
預金	学会事務局(国際文研三井住友銀行高田馬場支店)		1,537,510
	学会事務局(国際文研郵便振替口座)		802,225
仮払金			389,612
資産合計			2,729,347

(負債及び正味財産の部)		金額	
科目	適用		
流動負債			
前受会費		60,000	
未払金		52,215	
負債合計			112,215
正味財産合計			112,215
前期繰越金			2,714,609
当期収支差額			-97,477
負債及び正味財産合計			2,729,347

上記の通り相違ないことを確認しました。

平成20年9月6日

進化経済学会監査委員

平成20年9月10日

進化経済学会監査委員

赤孫子誠男

服部茂幸

進化経済学会
平成19年度 収支計算書決算報告
(平成19年度4月1日～平成20年度3月31日)

収入 内訳	増減		増減
	予算案	決算額	
会費	4,400,000	4,510,000	110,000
正会員該年度分	3,870,000	3,175,000	-695,000
院生会員該年度分	480,000	315,000	-165,000
院生会員該年度分	50,000	140,000	90,000
賛助会員該年度分		50,000	50,000
利息	3,641	3,641	0
寄付金	265,370	265,370	0
書籍売却代	141,200	141,200	0
雑収入	345,200	345,200	0
支出 内訳			
大会費	1,240,204	1,240,204	0
英文誌編集刊行費	2,500,000	2,589,766	89,766
通信費	200,000	172,590	-27,410
交通費	200,000	60,000	-140,000
事務用品費	50,000	31,500	-18,500
謝金	40,000	0	-40,000
送金手数料	20,000	9,922	-10,078
会議費	100,000	75,000	-25,000
印刷費	200,000	147,000	-53,000
事務委託費	400,000	701,906	301,906
国際交流費	100,000	0	-100,000
部会補助費	250,000	300,000	50,000
経済学会連合会費	35,000	35,000	0
予備費	1,500,000	0	-1,500,000
当期収入合計	4,400,000	5,265,411	865,411
前期繰越金	3,100,000	2,714,609	-385,391
繰越金			
総計	7,500,000	7,980,020	480,020
当期支出合計	6,595,000	5,362,888	-1,232,112
繰越金	905,000	2,617,132	1,712,132
総計	7,500,000	7,980,020	480,020

費目ごとの内訳

印刷費	
ニューズレターNo.22	75,600
ニューズレターNo.23	71,400
	147,000
事務用品費	
角2粒簡作成代	31,500
	31,500
会議費(理事会費等含む)	
理事会	75,000
	75,000
大会費用	
オータムコンファレンス	597,154
本大会	643,050
	1,240,204
未払金	
理事会食事代	48,000
大会葉書切手代	4,215
	52,215

編集後記

あけましておめでとうございます。会員の皆様、今年もよろしくお願いたします。今回も発行が遅れてしまいました。申し訳ありません。昨年12月に次期会長・副会長・理事選挙が行われ、その結果を待ってニューズレターをお届けしようと考えていたためですが、少し遅れたために掲載できた原稿もあります。中国における進化経済学のテキスト紹介です。良いレビューを掲載できたことを嬉しく思っています。

駆け足で過ぎ去る1月、2月を超えれば岡山での大会です。岡山で皆様に会えることを楽しみにしております。

編集担当・小川一仁(大阪産業大学)